

和製英語「デパート」考

王 敏東

要旨：本稿は日本人になじみの深い和製英語「デパート」を中心に、類語である「デパートメントストア」、「デパートメント」、「百貨店」との関係、ならびに各語の生成、変化、そして定着に至った様子を分析したものである。

キーワード：デパート、和製英語、語誌

1. はじめに

1852年のパリにおけるA・ブーシコによるボン・マルシェ Bon March の設立が百貨店の創始だと言われている。日本では現在の百貨店の多くは江戸時代の呉服商をルーツとする。百貨店化に最初に踏み出したのは1904年に株式会社化を宣言した三越呉服店である¹。

2014年現在、日本のデパートは日本国内のみでなく、漢字文化圏の中国、台湾、香港、シンガポールをはじめ世界各国に進出している。台湾だけでも、三越、SOGO、高島屋、阪神、阪急が林立し²、売り上げが好調である³のはもちろんのこと、国民の生活に密接な存在となっている。

ところで、デパートを指す言葉としては、現在一般に用いられている和製英語「デパート」⁴、

¹ 『日本大百科全書』、上原（1993：32）。他に、1904年12月18日の『読売新聞』に「三井呉服店が今回都合により新たに組織したる株式会社三越呉服店に一切の営業を譲渡したる次第 既報の如くなるが新会社司法金五十万円にして日比翁氏専務取締役となり高橋義雄、藤村喜七、朝吹英二、益田英作四氏 取締役は大島雅太郎、林健両氏監察役となることに内定しその株主 三井一家および同重役並びに店員などにして実地営業の衝に当たる店員も亦全て斯業の経験を積みたる旧来の者を用い本店の店舗 追って改築を為し其他諸般の改良を施し小売商店の規範たるに背かざるの設備を成す筈なり」という内容の「三越呉服店の新組織」が掲載されている。また、1905年1月3日の同紙に「当店販売の商品は今後一層其種類を増加し凡そ衣服裝飾に関する品目は一棟の下にて御用辨相成候様設備し結局米国に行はるるデパートメント・ストアの一部を実現可致候事」という全面広告も見られた。

² このような日本企業による出店（デパート）は台湾全土で二十数例も見られる。

³ 曾（2011 a、2011 b）。

⁴ 本稿では、特定の語を意味する場合は「」の内に入れ、その物や概念を表す場合はとくに何の記号

またはその元となった「デパートメントストア」もしくは「デパートメント」の他、漢語「百貨店」もある。また、「デパート」には「多種類の商品を陳列・販売する大規模小売店。百貨店。」の他、「(比喩的に) それに関するものが数多く集まっているようすや場所。」(『大辞泉』⁵⁾) という英語「department (store)」にない意味⁶まで生まれている。

このように、言葉「デパート」は、「デパートメントストア」、「デパートメント」、「百貨店」との競合(生成、変化と定着)、そして比喩的な意味の派生、などの点で興味深い。以下、「デパート」について、辞書(辞書に提示された用例を含む)や新聞などを資料とし、それぞれの生成、変化、そして定着に至った様子を語誌的に分析する。具体的には『大辞泉』、『日本大百科全書』など三十あまりの辞書が含まれるジャパンナレッジ⁷を利用し、各和製英語に関する情報を収集・検討することにした。新聞については19世紀に創刊され、発行数が日本での1位と2位をそれぞれ占めている『読売新聞』⁸と『朝日新聞』⁹から、各和製英語の用例をあつめて、検討する。

2. 和製英語に関する先行文献

鈴木(2008:41)は社会言語学的に、英語が借用・定着・同化した「和製英語」は言語現象の1つである「言語の変容」と考えるべきだと主張している。また、国立国語研究所(2004:34-5)が2003年に実施した『外来語に関する意識調査(全国調査)』における「和製外来語に対する意識」を見ると、「大いに作っていいと思う」人(9.9%)と、「ある程度は作っていいと思う」人(52.5%)をあわせると過半数(63.4%)となる。

和製英語を対象とした研究は従来、その構造や意味を論じたものが多い。それに対して、和製英語が日本社会で浸透した原因についての歴史的な考察は、重要だと思われながらも¹⁰、ほとんどなされていない。

たとえば、田辺(1990)は15点の資料から収集した和製英語2191語を形態分類した。

郭(1997)は外国語を素材として利用し、それを複合、派生、省略、縮合、転義、変形など加工することにより作られたものを、和製外来語とし、その造語法および特徴を検討している。

も付さずに示す。

⁵ 本稿で引用する辞書はすべてジャパンナレッジ(<http://www.jkn21.com/top/corpdisplay>)に収録されているものである。また、参照時期は2013年11~2014年8月である。以下逐次の注記を省く。

⁶ 牛津英語大辞典線版 Oxford English Dictionary Online – OED (2014年8月)。

⁷ <http://www.jkn21.com/top/corpdisplay>。また、前掲注5を参照。

⁸ 電子版「ヨミダス歴史館」(<https://database-yomiuri-co-jp.erm.lib.mcu.edu.tw/rekishikan/>)の使用である。

⁹ 電子版「聞蔵」(<http://database.asahi.com/library2e/main/start.php>)の使用である。

¹⁰ 平井(2003)。

平井 (2003) は日本で定着し、日本人になじみの深い和製英語 110 語について、形態論的に結合、縮約、省略、付加、混合、その他という 6 つに分類した上で分析し、結合型が最も多く (44%) て、次は省略型 (28%) である、という調査結果を得た。また、日本人が和製英語を作る際の、日本人の感性で英語を選択して組み合わせるといった全般的な特徴の他、4 音節に縮約したり省略したりすることが好まれる傾向がある、などの特徴もまとめている¹¹。

河口 (2004 : 15-16) は多くの人々が利用しており日本語化している外来語を短縮系、部分活用系、誤解系、混同系、分離系の 5 つに分けている。

柴崎 (2008) は和製英語をあつめた書籍、および、フリー百科辞典ウィキペディア、和製英語楽天、和製英語矯正辞典などの web サイトから新しいと思われる和製英語を収集・総覧した結果、和製英語を主に英語との関係によって、①英語として存在するが、英語の意味とは異なる意味で使われるもの、②英語の単語を変形、あるいは短縮して作られたもの、③英単語に存在しないが英語のような印象を与えるもの、④英単語を組み合わせで出来たもの、という 4 タイプに整理した。

伊藤 (2008) は新語を生み出す研究として、日本人に 2 つの商品を見せ、それぞれに名称を与えてもらうという実験をし、商品 1 では 41%、商品 2 では 34% の人が英語を用いた借用語を名称にした、という結果を得た。現代の日本人は外来語を用いることによって言葉の幅を広げ、豊かにし、活性化し、発展させていこうとしている、と結論付けられている。

楊 (2013) は和製英語が増える理由として、現実的な原因¹²、戦後の漢字使用の抑制と英語教育の主張という歴史的な原因、そして意識的な原因についてまとめているうえ、辞書を資料とした調査から、服装用語、食品の非糖類甘味料、肉類加工品、洋菓子類、香辛料などの分野に和製英語が多く用いられていること、1978 年にすでに和製英語が建築という分野に浸透し始めたことを明らかにした。楊 (2013) はさらに、『和製英語・カタカナ英語辞典』(Web 版) から和製英語を抽出し、語構成による分類と品詞の転換について検討し、原語からそのまま導入された単純語 (40%) と、原語の発音を変えずに 2 つの単語を組み合わせる結合型のものとして 74% を占めているという調査結果を得た。

前掲の和製英語に関する先行文献のうち、本稿で検討する「デパート」が取り上げられているものには郭 (1997)、平井 (2003)、鈴木 (2008)、楊 (2013) がある。郭 (1997) では「デパート」が、複合語 2 番目の単語を省略する上に、1 番目の単語の後半も省略する語例としてあげられている。平井 (2003) は「デパート」を省略という造語法によって作られた日本人になじみの深い和製英語だとしている。鈴木 (2008) では「デパート」は、第 1 要素の後半と第 2

¹¹ 「日本人が言いやすいように縮約したり省略したりしてカタカナ語を作ることは、とくにメディアで一般的な手法である。メディアを通じて日本国内に広がった。」とも述べられている。

¹² 明治以来、次々と流入してくる西洋の概念や物事を表すためカタカナ語が生まれ、語形が長いカタカナ語を用いやすくするため和製英語が増えたのだ、と述べている。

要素を省略したものに分類されている。楊(2013:82-83)は「デパート」は尾部省略の語に帰属するとされている。このように、これらの文献では「デパート」については省略による造語だということぐらいしか提示されておらず、これ以上深く論じられていないことが分かった。

また、『日本国語大辞典』は「デパート」の語誌を以下のように提示している。

- (1)明治三十七年(一九〇四)一二月、三越呉服店は、新店舗の形態として、米国に行なわれていたデパートメントストアを実現することを、各新聞に発表した。これが日本におけるデパートの起源とされ、以後、販売部門やサービスを拡大させつつ、高級感・信頼感をイメージとして持つ一店舗形式としての位置を確立する。
- (2)大正時代には後部要素を省略した「デパートメント」の形が出現したが定着せず、さらに短縮した「デパート」の語形が用いられるようになり、昭和初期にかけて普及した。
- (3)「デパートメントストア」の訳語として登場した「百貨店」も大正時代には定着し、今日に至るが、話し言葉としては一般に「デパート」の方が使用されている。

このように、「デパート」、「デパートメント」または「百貨店」が見られる年代が分かる。また、デパートの起源、日本での普及も大体把握できる。しかし、和製英語「デパート」の初出については明らかにされていないことや比喩的な意味に触れられていないのもやや物足りない気がする。

上記の語誌の情報を補足するには、他の辞書、さらに各事項について詳しく紹介している百科事典、そして日々刊行される新聞が有用だと考えられる。

3. 「デパート」の語誌

前述(「1. はじめに」)したように、西洋には19世紀にデパートが現れたのに対して、日本では20世紀初頭に三越が「デパートメントストア宣言」を発表したのは嚆矢だった。しかし、実際には、日本でも20世紀に入る前に現在のデパートの概念に近い販売形態の勸工場¹³なるものが存在しており、言葉として、たとえば1908年の「勸工場」のように、「勸工場」に洋語 department store の全訳を冠した例が見られる¹⁴。

洋語に由来する「デパートメントストア」、またはこれを略した「デパートメント」、「デパート」の他、「何でもそろっている店」を意味する「百貨店」もある¹⁵。

アメリカのデパートメントストアは物理的特徴としてその大きさと街の中心部への立地があるという。その販売形式としては、英語圏における“デパートメント”・ストアとは、モノよりも先に売場、すなわち各種専門売場が一堂に寄せ集められた店であるという理解が一般的で、

¹³ 「一つの建物の中に多くの店が入り、いろいろな商品を即売した所」(『大辞泉』)。

¹⁴ 永井荷風の『あめりか物語』(1908)「三十三丁目の勸工場デパートメントストアで売子をしていたんですがね」。

¹⁵ 『日本大百科全書』。また、百貨店の本質的特徴は、物的に大規模な組織的集中形態たる店であるとも言われる(芳谷(1958:173))。

専門の販売員がカウンター越しに接客を行なう、対面販売にデパートメント・ストアの特徴があるとされている。それに対して、日本では“百貨”店と呼ばれるために、デパートや百貨店と言えば、あらゆるモノが集められ、展示・販売される店であるという理解が一般的だという¹⁶。なお、1907年10月に神戸大学の『経済學商業學國民經濟雜誌』に「デパートメント、ストア」ニ就テ」という論考が発表されている。

『大辞泉』で「百貨店」を調べると、「デパート」を見るよう指示され、「デパートメントストア」「デパートメント」を引くと、「デパート」に同様」と示されている。『日本国語大辞典』では、「デパートメントストア」、「デパートメント」、「デパート」、「百貨店」のいずれの見出しも見られるが、「語誌」の欄が「デパート」に設けられている。このように、現代日本語においては「デパート」が一般的で、同義の「百貨店」、「デパートメント」と「デパートメントストア」がある、という国語辞典の立ち位置が見えてくる。

『日本国語大辞典』に提示されている「デパートメントストア」、「デパートメント」、「デパート」、「百貨店」のそれぞれの初出例は表1のようになっている。

表1 『日本国語大辞典』における「デパートメントストア」、「デパートメント」、「デパート」、「百貨店」の初出例

デパートメントストア ¹⁷	中外商業新報-明治三七年(1904)一二月一四日「凡そ衣服裝飾に関する品目は一棟の下にて用弁相成る様設備し、結局米国に行はるるデパートメント・ストアの一部を実現すること」、あめりか物語(1908)〈永井荷風〉雪のやどり「三十三丁目の <small>デパートメントストア</small> 勤工場で売子をして居たんですがね」
デパートメント ¹⁸	童謡・東京(1930)〈藤井樹郎〉「デパートメントだった、そつとのぞいて通ったのは」
デパート	放浪時代(1928)〈龍胆寺雄〉二・三「 <small>デパート</small> 百貨店の前がいいだらう」、ある女(1973)〈中村光夫〉一『『伯母さんは今日も青パスに乗ってデパートへ行ったって』いつ子がよく伯母の口癖をまねて苦笑ひしてゐた』
比喩的な意味	(語釈、用例のいずれもなし)

¹⁶ 楠田(2012:159)。

¹⁷ 「「デパート」に同じ。」と示されており、とくに語釈はない。

¹⁸ また、表1に提示していないが、『日本国語大辞典』ではデパートメント、の解釈として、「商品別の売り場」というのもあり、その例として1902年の『野心』に「手袋とか、シオール杯と云ふのは其で又別のデパートメントとして、各部に品の好い十六七のセールウイメンを置いて」が見られた。

百貨店	女工哀史 (1925) 〈細井和喜蔵〉三・一〇「降って大正十三年一月頃三越白木屋等の大阪の百貨店でモスリン会を催した時」
-----	--

1904年12月14日『中外商業新報』の例は前掲注1に示した『読売新聞』1905年1月3日刊(「明治三十七年十二月」日付)の広告と同じものかと思われる。

一方、「デパートメントストア」、「デパートメント」、「デパート」、「百貨店」の新聞での使用状況を年代ごとにまとめると、付録のようになる。

「デパートメント」の例としてはまず、前掲注1にも示した、1905年1月3日の『読売新聞』における「デパートメント・ストア」を用いた広告(広告の日付は「明治三十七年十二月」)が見られた。1906年7月12日の『読売新聞』には、「デバアート、メレトストア」が「小売店」を意味するものとして用いられている。また、同紙は1908年1月1日に「日本におけるデパートメントストアの元祖 三越呉服店」という記事を載せている。1908年6月13日の同紙の「大販売所時代」という記事では「デパートメントストア即ち大販売所」とされ、さらに「デパートメントストア時代と呼ぶも決して誇大にあらざるの状を呈し居り」と示されている。上記の例はいずれも洋語の全訳であった。

また、『朝日新聞』にも1910年以前に洋語の全訳が用いられている。1908年8月20日には「デパートメントストア」の略と思われる「デパートメント」の例も見られた。さらに、1913年10月12日の『朝日新聞』には「みくに座 演劇デパートメント」という広告が見られ、前掲『日本国語大辞典』に提示されている「大正時代には後部要素を省略した「デパートメント」の形が出現した」との指摘を修正する根拠を提供すると同時に、『大辞泉』の「(比喩的に)それに関することが数多く集まっているようすや場所。」という第二語積の早い例ともなっている。

和製英語「デパート」に関しては、1921年12月24日の『朝日新聞』に「東京デパート 洋服」の広告が見られた。また、『読売新聞』および『朝日新聞』での使用状況を見ると、いずれの新聞においても1930年代頃より、「デパートメントストア」などより「デパート」の方が多用され始めたことが判明した。なお、比喩的な意味で用いられている「デパート」は1927年7月3日の『朝日新聞』に見られた「演芸デパート」が最初だと思われる。

また、外来語系に対する「百貨店」という語は、管見の限り(付録)、1908年にすでに『朝日新聞』で用いられている。また、「百貨店」にも「デパート」同様比喩的な意味で用いられることがあり、1940年6月16日の『読売新聞』の「演芸百貨店」の例があげられる。

上述した、各辞書に提示された早い例と、『読売新聞』と『朝日新聞』に用いられた早い例をまとめると、表2のようになる。なお、各語形の最も早い例の時間をゴシック体で示す。

表2 辞書と新聞で見られた「デパートメントストア」、「デパートメント」、「デパート」、「百貨店」の初出例

資料 語	辞書			新聞	
	大辞泉	日本国語大辞典	日本大百科全書	読売新聞	朝日新聞
デパートメントストア	(用例なし)	1904.12.14、1908 <small>デパートメントストア</small> (勸工場)	(見出し語なし)	1905.1.3	1906.10.25
デパートメント	(用例なし)	1930 (「デパートメントストア」の略)「デパート」に同じ)	(見出し語なし)	1911.12.2 (デパートメント式)	1908.8.20
比喩的な意味		(語釈、用例なし)		(1913.10.12より以前の用例なし)	1913.10.12
デパート	(用例なし)	1928 (<small>デパート</small> 百貨店)、 1973 (デパート)	(用例なし)	1924.7.26	1921.12.24
比喩的な意味	(用例なし)	(語釈、用例なし)		(1927.7.3より以前の用例なし)	1927.7.3
百貨店	(用例なし)	1925	(用例なし)	1908.3.21 (百貨商店)、 1909.4.30 (日之出百貨商会)、 1911.12.2 (最善良の百貨)、 1922.12.14	1908.1.11、 1908.8.20 (英商百貨店計画)
比喩的な意味	(語釈、用例なし)	(語釈、用例なし)		1940.6.16 (演 <small>くわてん</small> 芸百貨店)	

表2で分かるように、「デパートメントストア」以外、「デパートメント」、「デパート」、「百貨店」の初出例は、本研究での調査の際に見出した新聞での例の方が『日本国語大辞典』に提

示されている新聞・小説などすべての例よりも早い。このような意味で、本研究の調査結果は、辞書などの語誌を、多少なりとも補足しうると考えられる。

4. 終わりに

これまでの検討により、以下のことが分かった。現在のデパートを指す用語としては、洋語の全訳である「デパートメントストア」が最も早く、20世紀の初頭には姿を現した。明治末期にはやや簡略化された「デパートメント」、そして漢語の「百貨店」も現われた。1920年代に入ると和製英語「デパート」が新聞で使用されるようになった。また、「(比喩的に) それに関することが数多く集まっているようすや場所」の意味としては、1910年代初期にすでに新聞で「デパートメント」の用例が見られる。1920年代には「デパート」にも、さらに辞書には掲載されていないが、1940年代には「百貨店」にも新聞での同様の用例が見られた。

また、近年、新聞などの古い資料のコーパス化により、速やかに語例などを調べられるようになったことが、今回のような語誌研究を進める上で大きな助力となった。このような状況が、今後の語誌研究のさらなる発展につながることを期待すると共に、その一端を担うような研究を積み重ねていきたいと考える。

謝辞：本研究は科技部が助成している研究計画（MOST103-2410-H-011-036-）の成果の一部である。科技部に感謝の意を表したい。

参考文献（年代順）

日本語

永井荷風（1908）『あめりか物語』新潮社

芳谷有道（1958）「スーパー・マーケットの概念」『彦根論叢』48・49、pp166-176

田辺洋二（1990）「和製英語の形態分類」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2、pp1-26

上原利實（1993）「市場社会と百貨店」『神奈川県立外語短期大学紀要 総合篇』15、pp29-38

郭翠英（1997）「日本語における和製外来語の造語方法及びその特徴」『日本語教育研究』33、pp123-130

木綿良行（2003）「わが国の百貨店の歴史的経緯とその評価」『成城大學經濟研究』162、pp157-180

平井美津子（2003）「和製英語の形態論」『Journal of rehabilitation and health sciences』1、pp54-59

河口鴻三（2004）『和製英語が役に立つ』文芸春秋

国立国語研究所（2004）『外来語に関する意識調査』

(<http://www.ninjal.ac.jp/archives/genzai/ishiki/ishikiquestionnaire.pdf>)

姫田慎也（2005）「製英語の複合語について」『龍谷大学国際センター研究年報』14、pp59-67

鈴木俊二（2008）「和製英語の研究：その構造と思想」『国際短期大学英語コミュニケーション』

学科 紀要』23、pp 1-47

柴崎秀子 (2008) 「英語母語話者と中国語母語話者における和製英語の知識と意味推測に関する調査」研究概要 (<http://kaken.nii.ac.jp/d/p/18652051.ja.html>)

楠田恵美 (2012) 「アメリカにおけるデパートメント・ストアとスーパーマーケット：ショッピング・センター小史のために」『社会学ジャーナル』37、pp157-165

楊劍 (2013) 「和製英語の日本語化のプロセスについて—和製英語の語構成による分類と品詞の転換—」『佐賀女子短期大学 研究紀要』47、pp75-86

亀田尚己・青柳由紀江・J.M.クリスチャンセン (2014) 『和製英語事典』丸善出版

英語

伊藤由樹子 (2008) 「The Background and Birth of English Words Coined in Japan (和製英語の背景とその生まれ方)」『二松學舎大學論集』51、pp109-123

牛津英語大辭典線上版 Oxford English Dictionary Online – OED

中国語

曾昭恩 (2011 a)

(<http://www.credit.com.tw/CreditOnline/cfcontent/value/weekly/index.cfm?sn=211>)

曾昭恩 (2011 b)

(<http://www.credit.com.tw/CreditOnline/cfcontent/value/weekly/index.cfm?sn=216>)

付録：『読売新聞』と『朝日新聞』における「デパートメントストア」、「デパートメント」、「デパート」、「百貨店」の例¹

新聞 語形 年	読売新聞				朝日新聞			
	デパートメントストア	デパートメント	デパート	百貨店	デパートメントストア	デパートメント	デパート	百貨店
～1900	0	0	0	0	0	0	0	0
1901～1910	「デパートメント・ストア」 (1905.1.3～、3広 告)、「小売店(デ パート、メレト ストア)」 (1906.7.12～、2 記事)、「デパート メントストア」 (1907.12.4～、3 記事)など複数の 記事に多数の用例 ²	0	0	「百貨商店」 (1908.3.21)、 「日之出百貨商 会」(1909.4.30)	「デパートメン ト、ストア」 (1906.10.25～、4 記事)、「デイパ パートメント・ス トア」(1909.6.3)	「デパートメ ント」 (1908.8.20)	0	「(広告)大智百 貨店 美顔術用 具」(1908.1.11)、 「英商百貨店計 画」(1908.8.20)

¹ 比喩的な意味の例は、斜めの字体で表示する。

² 本表における「複数の記事に多数の用例」には広告が含まれる。

1911 1920	～	「デパートメントストア」 (1911.2.4)、複数の記事に多数の用例	「デパートメントストア…デパートメント式…最善良の百貨」 (1911.12.2)、 「天下堂デパートメントストア」 ア…百貨」 (1912.5.15 広告) など少数例	「デパートメントストア」 (1911.3.28～、数記事)、「デパートメントストアー」 (1911.3.28～、数記事)、「デパートメントストア」 (1912.4.22～、数記事) など	「みくに座 演劇デパートメント」 (1913.10.12) 、「デパートメント」 (1915.12.21)	0	「大百貨会社」 (1914.6.27)
1921 1930	～	複数の記事に多数の用例	「百貨店」 (1922.12.14、2記事) など	「デパートメントストア」 (1921.6.16～、数記事)、「デパートメントストア」 (1922.12.12～、数記事) など	0	「東京デパート洋服」 (1921.12.24)、「演芸デパート」 (1927.7.3)	「百貨店」 (1926.1.29～、複数の記事に多数の用例) など

1931 1940	～ 「デパートメントストア」 (1931.7.28)、「デパートメントストア」(1931.12.26～、2記事) など	「デパートメントストア」(1931.7.28～、4記事) などの少数例	「デパート」(1931.1.6～、複数の記事に多数の用例)	「百貨店」 (1931.7.28～、2記事)、「 <small>くわてん</small> 演芸百貨店」 (1940.6.16)	0	0	「デパート」(1928.2.16) など	「百貨店」 (1931.2.6～、複数の記事に多数の用例)
1941 1950	～ 「東京デパートメントストア協会」(1950.9.6) などの少数例	0	「デパート」(1941.4.5～、複数の記事に多数の用例)	「百貨店」 (1941.3.1) など	0	0	「デパート」(1941.8.6) ～、複数の記事に多数の用例	「百貨店」 (1941.1.8～、複数の記事に多数の用例)
1951 1960	～ 「東京デパートメントストア協会」	0	「デパート」	「百貨店 (法)」 (1954.11.18～、	0	「日本デパートメントストア協会」	「デパート」	「百貨店」 (1951.12.29～、

